

月刊

2021

2
月号

特
集

逆転の雪



雪かきが創るつながり 筒井一伸 / ヨーロッパの雪 白坂蕃
津軽地方の雪と暮らし 曾我亨 / 雪や氷が促す人のつながり 井上敏昭
雪で凍傷を予防する 大石侑香

暖かな雪

「雪」と言えば冷たいもの、冬の寒さを思うひとが多い。しかし三好達治が、

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

とうたつたように、雪は、子どもたちの家ですっぽり包んで、静かに眠らせてくれるものであるかもしれない。それは人間だけではなく、たとえば椿や笹にとつてもそうである。

アルプスの北側のヨーロッパに住む人々にとつて、カメリア（椿）は、南の国への憧れの象徴であった。テカテカした葉をもつ椿は照葉樹であり、冬の寒さには弱く、北国では生育できない。しかし、日本では、対馬暖流のおかげで椿は青森県まで自生し、北海道でも、元来は熱帯の植物である竹の仲間

の笹までが、大地を広く覆っている。これらの植物が寒い北国で生育できるのは、冬のあいだ、雪の布団が大地を厚く覆い、守ってくれるからである。結晶のあいだに空気をたくさん含んだ雪は、ふわふわとした天然の断熱材なのだ。地表の気温が〇度以下でも、雪の布団に覆われた地面は凍らない。雪の布団をかぶれば、笹や常緑の植物も、そのまま冬越しができるのだ。だから北海道の笹や新潟県の雪椿は、背丈を縮め、雪に

小野有五

プロフィール
1948年東京都生まれ。北海道大学名誉教授理学博士。専門は自然地理学。『自然をみつめる物語』（岩波書店）で産経児童出版文化賞、『たかかう地理学』（古今書院）の刊行と社会活動により日本地理学会賞、人文地理学会賞などを受賞。アイヌ民族の権利回復運動、原発や核ゴミ地層処分への反対運動を続けている。

埋まって冬越しをする。たとえば雪椿は、雪の深さが一・五メートル以上になる地域に、それより背丈を低くして生きているのである。

日本海側の地域や北海道の大地にそんな暖かい雪の布団ができたのは、氷期が終わった後のこと、海面が上昇して、対馬海峡が再び今のようになり、日本海に対馬暖流が流入するようになってからである。海面が暖められると、冷たく乾いた冬の季節風との間に大きな温度差が生じ、海面からもうとうと水蒸気が立ち上がる。それが上空で冷やされ、雪になるのだ。

海面低下により、対馬暖流が日本海にほとんど流入できなかつた氷期は、今よりずっと寒冷であつたにもかかわらず、降る雪の量は大きく減つていた。雪の布団がなかつた約二万年前の氷期には、北海道の大地に笹はほとんどなかつた可能性がある。だから、干上がった宗谷海峡を歩いてきた旧石器人たちが、密生した笹ヤブを歩かずにすんだかもしれない。

逆に、縄文人たちは、大地を掘り込んだ堅穴を枝や樹皮で覆い、すっぽりと雪に埋もれて、暖かく冬を越すことができた。ドングリも雪の下で凍ることなく、春に芽を出し、縄文人の食を支えてくれたのである。

月刊 みんなぱく

2月号目次

- | | | | |
|----|--------------------------------------------------|----|----------------------------------------------------------|
| 1 | エッセイ 千字文
暖かな雪
小野 有五 | 12 | みんなぱく Information |
| 2 | 特集 逆転の雪
雪かきが創るつながり
筒井 一伸 | 14 | 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界
植物素材のつばなし帽子
上羽 陽子 |
| 4 | ヨーロッパの雪
——わたしの経験から
白坂 蕃 | 16 | みんなぱく回遊
見上げてごらん
——みんなぱくで星を巡る
山中 由里子 |
| 5 | 津軽地方の雪と暮らし
曾我 亨 | 18 | シネ倶楽部 M
ハンセン病への差別と偏見が招いた悲劇
——「砂の器」
池永 禎子 |
| 7 | 雪や氷が促す人のつながり
井上 敏昭 | 20 | ことばの迷い道
在日は「ひどすぎる」?
金 悠進 |
| 8 | 雪で凍傷を予防する
大石 侑香 | 21 | 次号予告・編集後記 |
| 10 | 〇〇してみました世界のフィールド
みんなぱく映像制作の裏話
寺村 裕史 | | |

逆転の雪

特集

読者のみなさんは雪に対してどのようなイメージをもっているだろうか。寒い冬に降る雪は冷たくて重く、雪下ろしや雪かきからは重労働を思い浮かべるかもしれない。しかし、雪とのかかわり方は国や地域によって異なり、ところによっては、雪は便利であたたかいものになる。雪に対する見方は一律ではない。世界各地の雪国の暮らしを知ると、みなさんの雪に対するイメージも逆転するかもしれない。

雪かきと地域コミュニティ
「近所のお年寄りの家の雪かきをしつつ『自分一人の力じゃどうにもならん』と痛感させられた。そして『地域での雪かき』を提案したら、みんなが賛同してくれた。感謝されたくてやつとるんじやおて、助け合いの精神。勝手にやつとるんだけえ、黙ってやればいい。雪かきばつかりじゃなしに、地域全体で声かけができるようになっていけばいいよお」(鳥根県飯南町赤名地区の方)

かつて雪国では、雪下ろしや道踏みなど冬季の作業の多くは地域総出でやるものであった。しかし道路除雪をはじめ、行政による公共サービスとしての除雪事業が確立していくなかで、「地域で雪かき」という活動が忘れられていったのかもしれない。しかし多くの雪国では過疎化が進み、



鳥根県飯南町赤名地区の「スノーヘルパー」の雪かき活動(上、2019年)と「レディスノーヘルパー」の積雪に備えた訪問活動(下、2020年)(提供:赤名自治振興協議会)

自宅の周りですら雪かきができない高齢者の方が増えている。そのため、冒頭の紹介のように、隣近所だけではない、より広い地域での支え合いを目指した「地域で雪かき」の取り組みが進められている。雪かきをおして改めて地域住民同士が多くのコミュニケーションをはかり、地域コミュニティとしての一体感を創り上げようとしている。

雪かきと関係人口
「ありがたい。こんな若い声きぐな何十年ぶりだ。こんな何にもねー家さ来てもらう

なほもつけどもんだ。気持ちとして喜んでもらうしかねー。自分でできることはこんなごどだ」(山形県酒田市日向地区の方)

雪かきにより創られるつながりは地域のなかだけに限ったことではない。大学生や若手社会人を広域からボランティアとして受け入れて、一斉除雪をおこなっている地域もある。豪雨などの災害ボランティアに遠方から参加する人たちも増えたが、除雪ボランティアはそれとは少し様子が違う。災害級ではない日常的な雪かきの担い手として期待されるが、遠方から来るボランティアは日々の雪かきができない。しかし雪が多い地域では積もり積もった雪が窓を覆い、太陽の光が部屋に入っていないため、玄関先の除雪とともに窓を覆った雪を取り除くのもボランティアの役割となる。光が入るようになった部屋、そしてお年寄りの耳に届く若い人の声。これらがどれだけ安心感をもたらすことか。

「雪かきをしたお宅の方がその後、除雪の事故で亡くなりました。ボランティア除雪が悪い影響を与えたのではないかとこの声も聞かされてきたなか、お線香をあげにいった時に奥さんから言われた『また来年も来ての』の一言が忘れられません」(日向地区の除雪ボランティアの方)

ボランティアの方

ボランティアの側も地域の人びととの「交流」を築しみつつ、より深いつながり創りに進んでいく。山形県酒田市日向地区では「にこにこ日向応援隊」というしくみを立ち上げ、除雪ボランティアなどで訪れた人びとのより息の長いつながり創りを進めている。昨今よく耳にする「関係人口(地縁や血縁のない地域に住む人びとと行き来などをしながらかわる人びと)」としてのつながり創りともいえよう。



山形県酒田市日向地区の「日向ささえあい除雪ボランティア」の雪かき活動(提供:日向コミュニティ振興会、2013年)

雪かきの射程と地域づくり

日本語には「○雪」ということばがさまざまあるが、これらは雪をどのような対象として扱ったかを表現している。例えば「除雪」では日常生活の維持を目的にネガティブな取り除く対象として「消雪」では人工的に融かして存在をなくす対象として雪がある。一方、「親雪」では雪はポジティブな対象である。ところでスコップや小型除雪機などを手におこ

なう雪かきの目的は何だろうか? 愚問に聞こえるかもしれないが、例えば雪かきに、都市などの普段は雪が降らない地域の人たちとの交流を楽しむ目的を付与したら、そこでの雪は親雪になる。つまり雪かきという行為は除雪のみを目的とするのではなく、考え次第でさまざまな目的をもちうるものなのである。雪かきは何を射程とするかについて、詳しくは上村靖司・筒井一伸ほか編著『雪かきで地域が育つ』(コモンズ、二〇一八年)に譲るが、目的を変えたり、別の目的を組み合わせたこと、雪かきは地域づくりの手段にもなる。

さてこの小文を書いているのは秋が深まり始めた二〇二〇年二月。コロナ禍のもと、雪かきのボランティアを受け入れてきた多くの地域がこの冬の活動をどうするべきか悩んでいる。しかしコロナ禍でも雪は降る。できない理由を並べてしまおうと中止するしかない。

地域側もボランティア側も納得ができる理由を準備しつつ、つながりを守るためにできることからやってみよう! これが「雪かきで地域が育つ」ための基本スタンスである。



関係人口づくりにむけた山形県酒田市日向地区の「にこにこ日向応援隊」の会員証

平地の積雪

人口一〇万人以上の世界の都市における年間の累積降雪量(国交省、一九八二～二〇一〇年の平均)の第一位は、平地のなかでは旭川の七・四メートルで、上位四位までは日本の都市だ。ヨーロッパでもっとも多いのは内陸にあるウィーン(六位)で



マッターホルンの東側にあるマッターホルン氷河パラダイス(標高3817メートル)は有名な夏スキー場だ。冬はイタリアとスイスを自由に往来でき、かつては「パスポートの必要なスキー場」であった(2016年9月)

七〇センチメートルである。欧州連合環境機関が作成した積雪分布を見ると、ヨーロッパの西岸海洋性気候地域と地中海性気候地域は山地を除いて「裸地」となっており、あまり雪は降らないし、降ってもすぐに溶ける。また、一般的に生活に支障がでるほどには積もらない。また地中海性気候地域(アフリカ北岸を含む)は平地では積雪どころか降霜もめつたにないが、雪が降ることもある。例えば、二〇一八年二月二六日のローマでは積雪深は一五センチメートル程度だったが、交通機関が麻痺状態になり、学校が休校になった。バチカンでは司祭も含めて大人もサンピエトロ広場で雪合戦をした。かつてシーザーが雪のフォロ

ロマーノを眺めたかどうか、わたしにはわからない。一方、西岸海洋性気候や地中海性気候でも標高が一五〇〇メートルを超えればスキーに充分な量の積雪がある。アフリカでもアトラス山脈をもつモ



オーストリア西部シュテューバイ=タール最奥部のフェルンアウ氷河上の夏スキー場(標高3050メートル)。氷河の融解を防ぐためにリフトの支柱部分などに白いシートがかけられている。こうした景観はアルプスでは一般的になってきた(撮影:吳羽正昭、2017年8月)

かつてシーザーが雪のフォロ

ロッコにはリフトを備えた立派なスキー場がある。アルプスでは氷河のうえにスキー場があり、夏でもスキーを楽しめる。

ヨーロッパ庶民の認識

ヨーロッパで暮らした日本人研究者には「日本

では雪が降るのか」と聞かれたことのある人も多い。ヨーロッパの庶民は「深雪国、日本」を最近になって認識した。このことをウィーン経済大学教授で知日派だったシンヒューバー先生からわたしは教えてもらった。彼は言った。「ヨーロッパの庶民は川端康成の『雪国』を読まないし、日本に雪が降ることを知らなかった。札幌冬季オリンピック(一九七二年)で日本が雪国であることを認識した。地図のうえで日本とヨーロッパを重ねると、北海道はイタリア北部、九州はアフリカにあたるから無理もない。そこで札幌は標高が高いから雪が降ると考える庶民が現在でも多いのだ

(札幌中心部は標高二〇メートル程度)。

また「日本にはサルがいる。ヨーロッパの庶民はサルがいる地域を熱帯や亜熱帯だと思うので、ここでは雪は降らないと考えるのだ」とも言った。ところで、わたしは移牧を求めてアルプス、カルパチア、パミール、ヒマラヤなどを歩いたとき、山地の残雪や、雪の溶けた地表の形がヒツジやウシだったりするのを見かけた。どんな形に見えるかと地元の人たちに聞いたが、首をひねるだけだった。日本では雪形といって、白馬岳の「代掻き馬」は有名だ。農民は雪形を見て農作業や播種の時期を判断した。雪形は農民の景観気候学である。どうやら雪形を認識するのは日本人だけのようで、じつに興味深い。

雪合戦禁止条例

閑話休題。一九八一年一月、王立スコットランド地理学会でイタリアの参加者から「アルプス南麓のアオスタ(イタリアでもっとも知られた冬季スポーツ地域)には『雪合戦禁止条例』があり、罰金は二万リラ(当時の日本円で約二〇〇〇円)」と聞いた。町当局は雪のボールでも凶器になりうると思った。町当局は雪のボールでも凶器になりうると思った。町当局は雪のボールでも凶器になりうると思った。町当局は雪のボールでも凶器になりうると思った。町当局は雪のボールでも凶器になりうると思った。

津軽地方の雪と暮らし

曾我 亨 弘前大学教授

除雪に挑む町のしくみ

冬の深夜、重機の重低音で目を覚ます。道路の雪を除ける作業の音だ。この音を聞くと、ありがたくもありウンザリした気持ちにもなる。翌朝、除雪車が道路脇に積んでいった固い雪の塊を除去しなければならぬからだ。朝になれば、各戸、色とりどりのスノーダンプを使って雪をかたづけていく。

雪を運ぶ先は公園だ。弘前市内には小さな公園がたくさんある。遊具がないのは雪置き場になる

からだ。また、市内には、地下水や河川の水を利用して雪を溶かす流雪溝も八七キロメートルに渡って整備されている。水を流す日時は決まっています、時間になると皆一斉に流雪溝の蓋を開け、雪を投げ入れていく。

住民が処理できない生活道路の雪は、ロータリー除雪車で大型トラックに積み、郊外へと運び出す。河川敷等に設けられた広い雪置き場に積んでゆく。弘前市は



上: 肩の高さまで積もった雪を処理する。2年続きの豪雪となった(2013年)
下: 路肩の雪を、皆一斉に流雪溝に流す(撮影:平井太郎、2013年)



疾走するホワイトインパルス。運転手は冬が農閑期になる農家の方々などである(提供：青森空港管理事務所)

者世帯の雪かきを支援している。こうした工夫の積み重ねによって、都市の機能が維持されるのである。

雪を観光資源にする

除雪が観光を浴びる機会のひとつは、青森空港の「ホワイトインパルス」である。三七台の除雪車が滑走路を疾走し、空港の除雪を約四〇分完了する。空港内にホワイトインパルス出動のアナウンスが流れると、観光客は大喜びだ。迫力ある除雪の動画はYouTubeでも見る事ができる。

雪そのものに観光資源としての価値を初めて見いだしたのは、津軽地吹雪会の角田周氏(かくだしゅう)だ。津軽平野では、毎年、猛烈な地吹雪が吹き荒れる。積もった雪が強風で吹き上がり、横から叩きつけてくる。角田氏は、この地吹雪を体験する企画を



地吹雪体験の成功は、雪に対する人びとの認識を一変させた(提供：青森県五所川原市)

考えた。「雪国地吹雪体験」ではモンペや角巻カンジキを履いて、地吹雪を体験しながら雪原を歩く。近年は、台湾やタイなど雪が降らない地域か

ら訪れる外国人観光客に人気となっている。

雪を資源とする

するあらたなきもある。田舎館村では、冬の田圃をキャンパスにしたスノーアートに取り組んでいる。当初は、地元有志がイギリスからスノーアーティストを招き、作品を共同制作した



幻想的な冬の田んぼアート2020「輝く冬の銀河」(提供：田舎館村役場)

除雪費として毎年一〇〜二五億円を費やしており、豪雪ともなると約二〇億円にも達する。この負担を軽減することは雪国の大きな課題である。

費用を削減する工夫として、雪を郊外に運ばなくてもよいように、民間が所有する遊休地を雪置き場として活用する制度も登場した。空き地を提供すると固定資産税等が減免されるしくみである。また、ボランティアが高齢

雪や氷が促す人のつながり

井上敏昭

城西国際大学教授

思い込みを壊してくれた雪

もう三〇年も前、大学院生時代に、北海道天塩町へ調査に行ったときのことである。まだ開拓の第一世代が存命で、地域産業が酪農に転換する前の、寒冷地での農作業や冬季の山仕事について、貴重な体験談を聞かせてもらうことができた。そのなかで、彼らは口をそろえてこう言った。「重くてかさばる物をどこかに届けるのは、雪が降るのを待つんだ」。当時の運搬手段は馬で、降雪前だ



ユーコン川への進入口。スノーモービルの轍(わだち)が残る(フォートユーコン、2008年)

と馬車を使うことになるが、そのころの道は人力でようやく切り開いた荒れ道だったため、馬の負担は大変大きかった。馬は貴重だったので、消耗させるのは望ましくない。一方、雪が降ると馬そりが使えた。でこぼこ道は雪に覆われると周囲の石や草も含めてなだらかになり、滑りやすさも相まって、馬の負担は大幅に軽減できた。さらに積み込みの際にも、車輪のために荷台に高さがある馬車よりも、より低い馬そりの方が「人間様も楽ができる」のだという。自動車普及する以前、重くてかさばる物を誰かに届けるために、雪は大切な働きをしていたのであった。

わたしはフィールドワークの醍醐味は「自分の思い込みを壊すこと」だと考えているが、まさにこのときがそうだった。雪のない土地で育ったわたしは、「雪閉ざされる」という凝り固まった認識をもっていただけだが、その固定観念を壊してもらえたのだ。

冬に出現する高速道路

後に調査地をアラスカの先住民社会に移したが、そこでも降雪が人びとの移動を促す事例に遭遇し



上：犬ぞりで針葉樹林帯に行く(フォートユーコン近郊、1997年)
下：現在、アラスカ先住民社会で普及しているスノーモービル(フォートユーコン、2008年)

た。

内陸アラスカはユーコン水系の河川が毛細血管のように広がる森林と湿地の世界である。雪がな季節は、森は徒歩、川はカヌーと、移動手段をいちいち切り替えないといけなかった。これは、徒歩がフォートホイラー(バイク型四輪バギー)、カヌーが船外機付きボートに置き換わった現代でも基本的に同じである。一方、冬は雪が降るだけではなく、河川も沼地もすべて凍る。そうすると、森だろうが沼だろうが、すべて犬ぞりで通行できるようになる。大きな河川に至っては、立木も何もない幹線道路と化すのだ。そのため、彼らは「冬は遠くの親戚や友人を訪問し合う社交的な時期だ」という認識を根強くもっている。夏に調査した際は不

機嫌でけんもほろろだったくせに、冬に再訪した際には陽気に歓迎してくれた理由がようやく理解できた。現在でも彼らは犬ぞりをスノーモービルに乗り換えて「ユーコン川は高速道路だよ」とうそぶいてマイナス三〇度の寒さのなか、数十キロメートル離れた隣村に嬉々として出かけていく。

凍らないよう雪に埋める

そのような「社交的な冬」に体験した、雪のもうひとつの活用がある。クリスマスポトラッチ（誰もが参加できる無料の食事会）の会場で仲良くなった男性がわたしを自宅に招いてくれたときのこと、彼はおもむろに、家の前

に積もった雪のなから缶ビールを取り出して渡してくれた。日本であれば冷やすために雪に埋めるという発想だろうが、外気がマイナスになるアラスカでは、むしろ凍り付かないように雪のなかで保温しているのがあった。互いの家を訪問し合う機会が増えるこの時期に、来客をもてなすために準備していたものである。待ちきれずに戸外で缶を開けた途端、ビールの表面に薄氷が張っていくのがわかった。



凍り付いて「高速道路」と化したユーコン川の支流（ユーコン平原上空から、2008年）

雪で凍傷を予防する

大石 侑香 神戸大学講師

シベリアでは雪はさまざまに利用されている。人間や家畜トナカイの飲み水になるのはもちろん、凸凹した大地ではそりやスキーの利用に欠かせない。ここでは、身体に関する独特な使い方を紹介する。

雪の上を走る

西シベリアの森林に暮らすハンティイは、狩猟採集や漁撈、トナカイ飼育を複合的に営んでいる。彼らはこうした生業活動や村落での諸用のために

頻繁に移動する。低地が広がるこの地域には、無数の湖沼が分布し、そのあいだを大小の河川が結んでいる。舗装道路のない森では、河川や湖沼が主要な路となる。夏は水上を船や船外機付きボートで移動し、冬には凍って雪が積もった川や湖の上をトナカイぞりやスノーモービルで走る。

トナカイぞりやスノーモービルは雪上をどこでも行くことができるためとても便利だが、木々のない川や湖の上では風を遮るものがなく、吹きさらしになるうえ、スピードを出して走行するの

で、より強く風を受けることになる。息を吸うだけで肺が凍るのではないかと思うくらい空気が冷たく、わずかに風が当たるだけでも肌が痛い。ましてスピードを出した覆いのない乗り物の上では、冷気が肌を打ちつけ、肉をおとて骨まで伝わる。二〇一七年二月、わたしはトナカイ放牧のためのキャンプ地にスノーモービルで向かった。友人のトナカイ牧夫が運転し、その妻とわたしはスノーモービルの後ろにつなげたそりに乗った。気温がマイナス四〇度以下だったため、防風のため、顔



湖上をトナカイぞりで駆ける（ロシア連邦ハンティ・マンシ自治区、2011年）

置をする。わたしの頬の表面はすでに冷凍肉のようになっているが、雪で頬をこすつてみると、わずかに皮膚が感覚をとりもどした。そもそも毛細血管の張り方が違うのか、わたしの顔はすぐに蒼白になるが、彼らの顔は寒ければ寒いほど真っ赤になる。皮膚表面まで血液が流れ

て温度を保つため、凍傷になりにくいそうだ。それでもトナカイぞりやスノーモービル等で長時間も走行するときは、牧夫らはときどき自分の顔を雪でこすっていた。こうすることで血行を保ち、凍傷を予防できるらしい。わたしも顔が凍って白くなる前に、雪でこするべきだと彼らに教えられた。



に大きなウールのスカーフを二枚巻いた。しかしそれでも風を受けて顔面が痛くなり、さらに、吐く息の湿気でスカーフと眼鏡が凍った。往復八〇キロメートルぐらいの走行だったが、それだけで両頬と鼻先が軽い凍傷になった。

雪は冷たくない？

村へ帰ると、真っ白な顔をしたわたしを見た人が驚いて雪をつかみ、わたしの顔にこすりつけた。凍傷になったら、彼らは血行をよくするために、まずは雪で患部をこするそうだ。そして次に、冷えた自分の手で覆い、それから患部をぬるま湯につけて温めるといふ手順で処



自らの吐息で顔が凍ったトナカイ（ロシア連邦ヤマル・ネネツ自治区、2017年）

こうした極寒の地では雪はそれほど冷たいものとは考えられていないのかもしれない。少なくとも凍てついた頬にとつては、雪はやさしい冷たさのようだ。



右：頬と鼻が凍傷になった筆者
左：雪の日の森の住まい（ヤマル・ネネツ自治区、2017年）

みんなく映像制作の裏話

寺村 裕史

民博 人類文明誌研究部



ウズベキスタン 映像取材の様子
はるばる日本から映像取材に来たということで、「写っていきなさい」と逆に被写体になることも。左から、音声担当の山口、撮影担当の岡部、4人めが筆者（撮影：宇野隆夫、2018年）

みんなくの映像作品をご覧になったことはあるだろうか。本館2階の無料ゾーンにあるビデオテークブースでは、現在、800本を超える作品が公開されているが、そのうちおよそ480本の撮影と編集には館内研究者が携わっている。本号では、みんなくの映像制作の舞台裏をのぞいてみよう。

みんなくオリジナルの映像作品

みんなくには、館内研究者が自身の調査・研究に基づき、自ら監督者となって、世界各地のフィールドで取材と撮影をおこない、編集したオリジナルの映像作品がある。すでに視聴された読者もいるかもしれないが、その制作過程は一般来館者にとって、なかなか窺いうかがることのできない部分だろう。ここでは、わたしがウズベキスタンで取材をおこなった作品を一例に、映像制作の裏側を紹介したい。

映像取材チーム

映像制作にあたっては、まず取材チームを編成する。チームといっても、テレビドラマの撮影のような大所帯ではなく、カメラマン、音声担当、監督する研究者の三人だけの小規模撮影隊である。カメラマンはその名が示すとおりビデオカメラによる撮影役、音声担当は常にカメラマンのそばにいて、人の話し声や川のせせらぎ、鍋がぐつぐつ煮立つ音など、環境音を拾うためのマイクを対象に向け続けるといって、一見地味だが重要な役割を担っている。

では、監督者であるわたしは何をしているのかというと、事前の調査に基づいて、作品の内容、構成を念頭におきながら、「こういうシーンを、このアングルで、この部分を強調して撮影してください」といった指示を出す。もっとも実際の撮影では、わたしが余計な口出しをしないでお任せしてしまった方が、想像するよりもずっと良いアングルや構図で撮ってもらえていたりする。それゆえ、カ

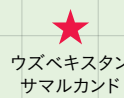


バザールで買い物をしている場面の撮影風景（2018年）

メラが回り始めてしまえば、いちばん暇なのは監督者かもしれない。「監督」というと随分偉そうに聞こえるが、実際は現場の状況に合わせてチーム皆で相談しながら取材をおこなう。そして、静止画撮影の際は音声担当が照明係に早変わりし、カメラを手持ちで移動しながら撮影する場合はわたしが三脚を持ち運ぶなど、少人数であるがゆえのチームプレーで撮影を進めている。

撮影時の苦労話

撮影時には、いろいろ予期せぬ状況に陥ることもある。例えば、結婚式の取材では、式を挙げる家族に雇われた現地のプロカメラマンが張り付いていたため、彼らの邪魔にならないように、うまくポジションを探りながら撮影をしなければならないように、うまくいった。一方で、「はるばる日本から来たのだから一緒に写りなさい」と、撮影する側のはずが、される側になることもあって面白い。料理の撮影では、炎が上がっているタンディル（パン焼き窯）に近寄りすぎて機材に燃え移らないように注意したり、バザール（市場）では、なるべく作品テーマと関係のない人が映りこまないようカメラアングルに気を配ったりするなど、撮影時の位置取りはとても重要である。



ウズベキスタン サマルカンド



タンディルの撮影は、近寄りすぎると熱いうえに、機材に火が燃え移らないように気を遣う（2018年）

内の有名なモスクを撮影していたときに、警察官に「ちょっとこっちへ来い！」とよびとめられた。同行していたウズベク人の調査協力者が対応するあいだ、我々取材チームは「撮影を止める。映像を消せ」などと難癖をつけられるのではないかと冷や冷やして待っていたが、なんのことはない、「遠く離れた日本でウズベキスタンの文化を紹介してくれるのは嬉しい。良い映像を撮ってください」とのこと。ホッとするとともに、ある意味お墨付きをもらったようなもので、この後の撮影はやり易くなった。ただし、こうした好意的な反応ばかりとは限らないように、実際に撮影禁止の建物もあるため、撮影対象や場所には、やはり気を遣わなければいけない。

編集作業

映像制作は、撮影して終わりではない。帰国後は、シナリオを作った構成を練り、どの場面を使うか、あるいはカットするのかといった映像編集作業、ウズベク語から日本語への翻訳と字幕入れ、ナレーションの吹き込みなど、さまざまな作業を経たうえで、館内研究者による試写、意見交換をおこなって、ようやく一本の映像作品が完成し一般公開される。



自分たちが映っている編集途中の動画を確認してもらっている様子。左端が筆者（撮影：岡部望、2019年）

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

特別展

「復興を支える地域の文化」
3・11から10年

2011年の東日本大震災では、復興の原動力としての「地域文化」に大きな注目が寄せられました。本展示では、東日本大震災から10年が経つ今、災害からの復興を支える地域文化をめぐる活動について、あらためて振り返ります。また、豊かな社会の礎となる地域文化の大切さとその継承について考えます。

会期 3月4日(木)～5月18日(火)

会場 特別展示館

■関連イベント

研究公演

「阪神虎舞みんぱく公演」
阪神虎舞による演舞とともに座談会を開催し、東日本大震災から10年の経過のなかで、東北と関西を結びつけた阪神虎舞結成の物語を紹介し、災害の記憶への向き合い方について参加者とともに考えます。

日時 3月6日(土)13時20分～15時
(12時50分開場)

会場 本館前庭

(申込不要、参加無料)

※雨天時は特別展示館休憩所

出演 阪神虎舞

座談会

「芸能を移植する——阪神虎舞の試み」

パネリスト

橋本裕之(大阪市立大学都市研究プラザ)

特別研究員、坐摩神社権禰宣

中川真(大阪市立大学都市研究プラザ)

特任教授

山本和馬(阪神虎舞)

金崎亘(城山虎舞保存会)

笹山政幸(被災文化遺産所在調査専門調査委員)

コーディネーター 日高真吾(本館教授)

司会 寺村裕史(本館准教授)

みんぱく映画会

みんぱく映像民族誌シアター

本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌シリーズ」から選定した作品を上映し、監修者によるトークをおこないます。

会場 オンライン開催

(シアターセブンからのWEBライブ中継となります)

申込方法 要事前申込(先着順、定員100名)

名、参加無料

申込期間 2月2日(火)まで

(定員になり次第受付終了)

※みんぱくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。

イトよりお申し込みください。

「常なうさぎの音

耳を通して異界とつながる」

日時 2月13日(土)

14時～16時

解説 山中由里子(本館教授)

司会 福岡正太(本館教授)

「カンボジアクメール人の伝統芸能」

日時 2月27日(土)

13時30分～16時

解説 福富友子

(東京外国語大学 非常勤講師)

寺田吉孝(本館 名誉教授)

司会 福岡正太(本館 教授)

公開講演会

「グローバル化する武道と中東」

オリンピックイヤーである2021年。本講演会は、空手の中東への普及から、中東と日本をつなぐ人と文化の往来を描き出します。空手家の足跡と社会的背景から、武道のグローバルスポーツとしての展開について考えます。

日時 3月19日(金)18時30分～20時45分

(開場17時30分)

会場 オールホール

(大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞社ビルB1)

講演 相島葉月(本館 准教授)

小倉孝保(毎日新聞社 論説委員)

パネリスト

相島葉月(本館 准教授)

小倉孝保(毎日新聞社 論説委員)

アレキサンダー・ベネット(関西大学 教授)

司会 河合洋尚(本館 准教授)

主催 国立民族学博物館 毎日新聞社

※要事前申込先着順、定員180名、参加無料

※手話通訳あり

※WEBライブ中継でも参加いただけます(要事前申込)。

お問い合わせ先

研究協力課 研究協力係

06-6878-18209

本館展示場の一部閉鎖について
本館展示リニユーアル音楽展示、言語展示、

ビデオテープの一部のため、左記の期間、展示場の一部を閉鎖します。ご迷惑をおかけしますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

閉鎖期間 3月24日(水)まで

共催展

京都大学総合博物館2020年度特別展

梅棹忠夫生誕100年記念

「知的生産のフロンティア」

会期 3月14日(日)まで

会場 京都大学総合博物館

休館日 月、火曜日(平日) 祝日にかかわらず

主催 京都大学総合博物館

国立民族学博物館

※3部制、完全予約制

關雄二教授 「文化庁長官表彰」受賞

永年にわたり、日本とベルギーの文化財研究の発展と連携に尽力するとともに、ベルギーの文化遺産の国内外における発信や啓発に大きく寄与し、我が国の文化財保護と国際協力に多大な貢献をしているとして受賞しました。

山本紀夫名誉教授 第29回「松下幸之助花の万博記念賞受賞」

「自然と人間との共生」という花の万博の基本理念の実現に貢献する、すぐれた学術研究や実践活動の顕彰を目的とする、松下幸之助花の万博記念賞。松下幸之助記念賞を公益財団法人松下幸之助記念志財団より受賞することが公表されました。

伊藤敦規准教授 第10回「地域研究コンソーシアム賞 研究企画賞」受賞

代表をつとめる国際協働研究「ソースコミュニティ」が地域研究のさらなる進展を図るすぐれた活動であるとして受賞しました。

みんぱくセミナー

会場 本館セミナー室

※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内します。

※要事前申込(先着順、定員各回100名、参加無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です))

※事前予約の方は入場整理券を当日11時から本館2階にて配付します。

第506回 2月20日(土)13時30分～15時(13時開場)

南半球の華僑華人——客家を中心として

講師 河合洋尚(本館 准教授)

21世紀に入り、南半球では華僑華人の移住が急増しています。そのうち客家が多いタヒチ、ニューカレドニア、ペルーをとりあげ、中国系新移民の流入による社会・文化構造の変化を解説します。

【申込期間】

●一般受付

期間：2月18日(木)まで

※友の会電話先行受付は終了しました。

第507回 3月20日(土) 祝

13時30分～15時(13時開場)

【特別展復興を支える地域の文化——3・11から10年】関連

杜鹿半島の民俗誌——復興キュレーション

講師 加藤幸治(武蔵野美術大学 教授)

日高真吾(本館 教授)

震災から10年間の民俗調査と博物館活動を紹介し、自然の営み・復興の繰り返し返しの歴史・家族や隣人の思い、三つの時間から描き出す杜鹿半島の民俗誌。キーワードは「津波」「クジラ」「そして「ハンギン」です。

【申込期間】

●一般受付

期間：2月22日(月)～3月18日(木)

【セミナーの申込方法】

本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。

【友の会(維持会)正会員】電話先行受付(定員20名)

【申込先】千里文化財団友の会事務局

電話06-6877-8893

(9時～17時、土日祝を除く)

刊行物紹介

■丹羽典生 編著

『**応援の人類学**』

青弓社 3,400円(税別)

応援とは普遍的現象なのだろうか。日本の大学応援団からスポーツやアイドルファンまで、個別的になされるものから集団を形成する応援まで、それらを比較分析することで応援の文化を多角的に描き出す試み。



●一般受付
・オンライン予約(定員60名)
みんぱくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。
・当日参加申込(定員20名)
11時から本館2階セミナー室前にて受け付けます。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話をしよう

会場 第5セミナー室

※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展示観覧券)

2月14日(日)14時30分～15時30分(14時開場)
海を越えたサビエンスとオセアニアへの移住
——発掘の最前線——
話者 小野林太郎(本館 准教授)
定員 42名

2月28日(日)14時30分～15時(14時開場)
ろう者と聴者の協働する「二つ通訳」
話者 飯泉菜穂子(本館 特任教授)
定員 40名※手話通訳あり

※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

友の会

友の会講演会

友の会会員に限定して開催します(要事前申込、先着順)。受付フォームは友の会ホームページ内にあります。

※2月はオンライン(ライブ配信)で開催します。

第509回 2月6日(土)13時30分～14時40分

セネガル河上流域の変容と「文化週間」

——故郷に残った人びとの選択——

講師 三島禎子(本館 准教授)

西アフリカのソンケ族民族はフランスなど海外への労働移民として知られています。地元に残った人たちは、さまざま開発援助プロジェクトに巻き込まれる一方で、セネガル河上流域の諸民族の文化や職人技術を紹介する「文化週間」を立ち上げました。この行事は政府の援助なしに、「地域ラジオ」が中心になって10年来、継続しています。地域開発を担う地域ラジオと女性グループの活動について紹介し、この行事の意義について考えます。

受付フォーム

https://www.senri-f.or.jp/509tomot/

※3月は午前中に開催します。

第510回 3月6日(土)10時30分～11時40分

【特別展】復興を支える地域の文化——3・11から10年——

災害を後世に伝える——記録・供養・教訓

講師 林勲男(本館 教授)

大きな出来事は長く人びとの記憶に留まりますが、決して永遠のものではありません。災害を経験した人びとは、手記や絵図、石碑や写真などそれぞれの時代のさまざまな手段を用いて記録に残してきました。そこには出来事を後世に伝えるだけでなく、災害で亡くなった人を供養し、教訓を伝えることによって、将来の災害での被害や死者を少なくしたいという願いもうかがえます。本講演では、津波常襲地域の「津波碑」についてお話しします。

※特別展関連の友の会講演会は、みんぱくフリーパスをお持ちの方も無料でご聴講いただけます(本催しも該当)。

【聴講方法】

①本館第5セミナー室にて聴講(定員40名)

②オンライン(ライブ配信)での聴講

受付フォーム

https://www.senri-f.or.jp/510tomot/

世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

植物素材のつばなし帽子

上羽陽子 民博人類文明誌研究部

木彫りの知識が、ユネスコの無形文化遺産リストに記載されているザフィマニリでは、豊かな植物資源を用いて、バスケットリーの文化も育まれてきた。そのひとつ、つばなし帽子に目を向けると、生活に根差した手仕事の美しさ、面白さが見えてくる。

子どもたちが笑いながらスイセンの葉で敷物づくり遊びをしている。よく見ると、膝を立てた右足で、編み始めの葉の端をしっかりと押さええている。その動作は、母親が敷物を編むときとまったく同じだ。

ザフィマニリとバスケットリー

ここマダガスカル東部に住む、ザフィマニリの人びとは、さまざまな植物を素材にして、敷物やカゴ、帽子など多様なバスケットリーを製作している。おもな素材は、複数種のカヤツリグサ科の植物である。それぞれ、長さや太さ、硬さ、弾力が異なり、作り手は用途に応じて、適切な種類の植物を選択している。

バスケットリーに囲まれるザフィマニリの暮らしのなかで、とりわけ目立っているのがつばなし帽子だ。帽子づくりには、フルンピカサとよばれるカヤツリグサ科の一種を用いる。刈り取った茎を



網代(あじろ) 編み技術で敷物づくり遊びをする少女

乾燥させてから刃物でしごき、繊維をのぼしてしなやかにする。そして、砧打ちをし、平らに薄くして、そのまま、あるいは化学染料でピンク色、緑色、紫色に染色してから編み材にする。

これで編まれた帽子は、つばなしで頭にぴったりと被ることが特徴で、自家用のほか販売用にも製作される。寒暑への対応や埃よけ、雨よけ、森を歩く際に頭部を保護するなどの役割があり、男女ともに身につける。

髪型は、まるで造形作品の展示会のような。帽子は、編み込んだ髪型をより一層美しく見せる道具としても役立つ。ぴったりとしたつばなし帽子を被ることで、帽子の平面部分と、髪型の立体部分が対照的な印象となり、互いの美しさを引き立てている。

使い続けることで

加えて、フルンピカサ製の帽子は、髪を洗う機会が少ない彼女たちにとって、防臭の役割も果たしている。髪の毛がフルンピカサに染み込み、自然素材がもつ独特の甘い香りといまっぴら、香ばしい匂いがたつ。さらに、髪の毛の水分や油分は、帽子をより魅力的にする効果もある。つくりたてのころ、青々とした帽子の編み材は、使い続けられることで、徐々に黄金色と

髪型と帽子のかわり合い

しかし、調査時、多くの男性は、市場で購入できる木綿製の野球帽や、つば付き帽子を着用していた。つばなし帽子を被るのは子どもや女性が多く、外出時のみならず、室内でも身につけていた。このような男女差や室内でも着用する理由は、どうやら髪型と関係しているようだ。

ザフィマニリの男性は髪を短くしているが、女性には切らずに長く伸ばしている。その髪はやや縮れ毛のため、束ねるだけでは、自然に絡まってしまふ。そこで、女性たちは長い髪の毛に定期的に水とココナツ油をつけて、櫛やさらで梳き、編み込みをする。このように編み込んでおけば、毎日髪をとかす必要はない。でもやはり、生活のなかで髪は乱れてくる。そんなとき、帽子はヘアバンドのように髪を押さえる役割を果たしている。

女性の髪型には、まとめ方や編み込み方の違いによって、細かな呼びわけがある。バスケットリーとなり、特有の光沢をおびて肌触りもよくなる。そのうえ、繊維がひきしまるため、編み組み文様によりはつきりと目立つようになる。

ザフィマニリでは、多くの手仕事息づいていて、現地の市場では、帽子をはじめ、カゴや敷物などを含む、さまざまな工業製品も見ることが出来る。しかし、工業製品には、ザフィマニリのつばなし帽子のように、使い込まれることによつてうみだされる独特の香りや艶、風合いを見ることができない。そこに、植物素材のバスケットリーがつくり、使い続けられている理由のひとつがあるのかもしれない。



何年も着用すると光沢をもった黄金色へと変化する



調査時、流行していた携帯電話を模した「キドック・テレフォニア(ふたつわけ・携帯電話)」とよばれるスタイル



長い髪で三つ編みや九つ編みをし、後頭部に編みまとめる



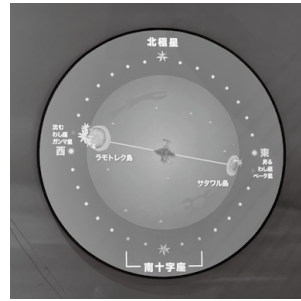
採集したフルンピカサ



住居の床には何枚も敷物が重ねられ、米や穀物、野菜、衣類などをいれるカゴが所狭しと並んでいる(写真はすべて2012年に撮影)

見上げてごらん——みんなくで星を巡る

やまなか ゆりこ
民博 学術資源研究開発センター 山中 由里子



スターコンパスを用いた航海技術を紹介するアニメーション「伝統的航海術」

に向かっておこなう礼拝の方向(キブラ)を算出する方式は、ムスリムの天文学者たちが一〇世紀ごろまでに確立したもので、今でも有効だ。ただそれは、地上の緯度経度がベースになっている計算式なので、敬虔なムスリムのマレーシア人宇宙飛行士が国際宇宙ステーションに派遣された際には、宗教学者や科学者たちのあいだで宇宙空間でのキブラについて議論が繰り広げられ、最終的には「宇宙飛行士に任せる」という結論になったそうだ。

時をナビゲートする指標

★アステカの暦石(アメリカ展示)

太陽の動きの規則性に基づいて時を計る暦は農耕のサイクルをコントロールする手段であった。この古代アメリカ文明を代表する石彫の中心には、トラルテクトリという大地の怪物の顔があり、その周りには、滅んだ四つの太陽(時代)や五番目の太陽である現世の終末の日が描かれている。これ

東南アジア展示 「芸能と娯楽」セクション



タイ・ヤイの占星術書(タイ、H0199390)

中央・北アジア展示 「社会主義の時代」セクション



ひげ剃り「スポーツニク」(ロシア、H0277675)

西アジア展示 「信仰」セクション



キブラ・コンパスと使用説明書(イラン、H0253871)

中国地域の文化展示 「工芸」セクション



ストラップ(毛沢東)(中国、H0269306ほか)

アメリカ展示 「祈る」セクション



アステカの暦石(複製)(メキシコ、H0009490)

ヨーロッパ展示 「生業と一年」セクション



アドベント・カレンダー(ドイツ、H0216954)

まだまだあります。みんなくの星!

- ① 伝統的航海術(映像)
- ② アクリル画「七人姉妹」(H0180880、オセアニア展示)
- ③ 星祭りのボール(H0085809、オセアニア展示)
- ④ 流行歌のレコード(音楽展示)
- ⑤ 『星の王子さま』(言語展示)
- ⑥ 太陽神(スーリヤ)(H0133581、南アジア展示)
- ⑦ 巫神図(七星任、日月神将ほか)(H0214651ほか、朝鮮半島の文化展示)
- ⑧ 七夕飾の花笠(H0037150、日本の文化展示)
- ⑨ 七夕のウマ(H0036448ほか、日本の文化展示)
- ⑩ 雨ごい踊のうちわ(H0037015～16、日本の文化展示)
- ⑪ ざんざか踊のしない(H0036814～15、日本の文化展示) などなど……

だけ巨大な石に正確な彫りを施す技術からは、農耕を基盤とした堅強な統治システムと高度な文明があったことがうかがわれる。
★タイ・ヤイの占星術書(東南アジア展示)
星の巡り合わせや天体現象で人や社会の運勢を占う術は、古くからさまざまな文化圏にある。星の動きに微を読み解き、未来を先取りした行動の根拠とするタイの占星術は、インド由来の占星学体系を基盤とし、人びとが信仰する仏教と共存関係にあるという。タイ・ヤイ(シヤン)族の占星術は、さらに地域によって中国やビルマからの影響が認められる。この資料には「バル(鬼)のシヤン系の絵柄が描かれている。

星の象徴性

★アドベント・カレンダー(ヨーロッパ展示)

常ならざる星の出現も重大な出来事の徴として解釈された。クリスマスまで一日ずつ窓をあけてカウントダウンするこのカレンダーの左上には、キリストの誕生を東方の博士たちに知らせた星が描かれている。クリスマス・ツリーののっぺんにつける星も、この「ベツレヘムの星」を象徴している。

★毛沢東グッズ(中国地域の文化展示)

五芒星、六芒星の星型は思想や宗教をあらわす記号になった。共産主義のシンボルである赤い星がついた人民帽をかぶる毛沢東が描かれている飾り。

緯度、標高、季節、街灯の有無などによって見え方は違うかもしれないが、海底底に棲んでいるということでない限り、地球上のどこからでも星、月、太陽は見える。そしてその天体の動きは、全人類の日々の生活、季節の営みを司ってきた。二〇世紀後半になるまでは人間の手の届かない存在で、直接利用できる資源とはならなかったが(まれに降ってくる隕石は別として)、人間の生活は何らかのたちで太陽や月のエネルギーを頼りにしてきた。それらの位置と動き、満ち欠けを正確に理解することは生存に欠かせない術であり、さまざまな象徴的な意味合いも見いだされてきたので、天体に関連した道具や表象物はまさに星の数ほどある。

空間をナビゲートする指標

★スターコンパス(オセアニア展示)

磁気コンパスも海図もないサタワルの航海士たちが、星や星座の動きの規則性から導き出したスターコンパスは、機械が示す道順に頼ることに慣れてしまった我々を圧倒する。星の位置と波と風を頼りに、大型カヌーで外洋を数千キロメートル移動する技術がアニメーションでわかりやすく解説されている。(マップ①)

★キブラ・コンパス(西アジア展示)
イスラームの信者がメッカのカアバ神殿

★『星の王子さま』(言語展示)

小惑星から来たという不思議で寂しげな王子の話は世界中の人びとの心に響いた。第二次世界大戦中にフランス語で出版されたサン・テグジュペリのこの作品は、一八〇以上の言語に翻訳されている。(マップ⑤)

星へのあこがれ

★ひげ剃り「スポーツニク」(中央・北アジア展示)

一九六〇年代に人類は大気圏外に人工衛星を打ち上げることに成功し、星空に少し近づいた。ソ連が打ち上げたスポーツニクの名を冠したひげ剃りは、宇宙へのあこがれと社会主義下の偉業を示す生活用品。

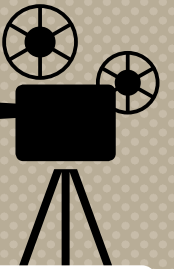
★流行歌のレコード(音楽展示)

みんなく星巡りの締めくくりは、地上の星々に目を向けてみよう。往年のスターたちの歌謡曲には星を題材としたものが結構ある。(マップ④)

展示場で「天体観測」したら、あなたはいくつの星を見つかりますか?



流行歌のレコード



ハンセン病への差別と偏見が招いた悲劇

池永禎子
いけながさちこ

総合研究大学院大学博士後期課程

ハンセン病に正面から切り込んだ映像化作品

原作である松本清張の同名小説は、一九六〇年から翌六一年にかけて『読売新聞(夕刊)』に連載され、ハンセン病を物語の背景としたことで大きな話題をよんだ。事件の手がかりとなることばが、音韻論あるいは方言圏論に基づいて設定されていることも特筆すべき点である。

一九七四年に松竹で映画化、その後民放で計七回テレビドラマ化されたが、ここでは、一九七四年に松竹が製作した映画作品について記す。原作が同じでありながら、物語の背景にハンセン病(劇中では当時の呼称「ハンセン氏病」)を用いたのは映画作品だけである。テレビドラマにおいてはハンセン病に対する「配慮」が見えるといえれば聞こえが良いが、松本清張が切り込んだ社会問題としてのハンセン病に対する偏見・差別を、「あえて触れずに」「腫れ物」として回避した過剰な「配慮」、もしくはハンセン病問題への無関心を感じざるを得ない。

わたしは映画公開当時まだ生まれていない。テレビドラマを見たことがきっかけで原作を読み、映画(デジタルリマスター版)を鑑賞した。かつてハンセン病患者が受けた差別・偏見の数々が随所に再現されており、脳裏に焼きついている。

「宿命」の共鳴

物語は、東京の国鉄(現在のJR)蒲田操車場構内で起こった身許不明男性殺人事件から始まる。警視庁の今西刑事と、西蒲田署の吉村刑事らは捜査に奔走するなか、新進気鋭の若手音楽家・和賀英良と偶然出会った。和賀は近く「宿命」という交響曲を自ら指揮とピアノ演奏をおこなう弾き振りで発表する予定であるという。一見、事件とは何の接点もないと思われるが、和賀だが、二人の刑事の真実を追い求める執念が、和賀の栄光に隠された過去を明らかにし、ハンセン病をめぐる「宿命」を背負った犯人を追い詰める、というのが物語の概要である。



病棟患者への食事の配膳のようす。1950年代前半
(写真所蔵：国立療養所大島青松園入所者自治会)

「砂の器」

1974年/日本/日本語/143分/DVDあり

監督：野村芳太郎

出演：丹波哲郎、加藤剛、森田健作ほか

人の刑事が東奔西走して手がかりを求める様子が丹念に描かれている。東北弁だと思われた被害者のなまりが、島根県出雲地方で使用される別の方言であることと突きとめる執念もすさまじい。

本作のクライマックスはこの先である。およそ四〇分に渡り和賀が演奏する交響曲「宿命」にのせて、事件の真相が今西刑事によって淡々と語られ、ハンセン病を患った父が幼い息子を連れて四季折々の全国を放浪するシーンが流れる。コンサート、捜査会議、父子

の放浪の三つが絶妙なバランスで視覚的に編集されているのである。生まれ育った村を追われ出ていく、遍路姿で門立ちをするも追い払われる、ハンセン病患者とわかると石を投げられる、といった壮絶な差別・偏見にさらされる父子の様子には、映像ならではのリアリティが感じられる(原作ではここまでこだわった描写はない)。丁寧な取材がなされた成果であろう。

ステイグマとエゴイズム

映画の制作・公開に際しては、全国ハンセン病患者協議会(現・全国ハンセン病療養所入所者協議会)がハンセン病に対する差別・偏見を助長する、患者が誤解されるとの懸念を示し、制作に反対したが、製作側は、映画を公開することで、普及啓発の一端を担い

たいと説明し、協議会からのいくつかの要望を受け入れることで決着した。

今西刑事が事件の真相を語るシーンでは、「かつてら病とよばれ、不治の病とされたハンセン氏病」という説明が加えられ、映画のラストでは字幕でハンセン病が治る病気であること、元患者の社会復帰を拒むのは社会の偏見・差別であるという趣旨のメッセージが流れる。

殺人を犯してまでハンセン病の父親をもつことを隠し通そうとするその行為はエゴイズムに他ならないが、それほどにハンセン病が背負わせたステイグマ(負の烙印)は重く残酷だったのである。犯人・本浦秀夫は、大阪空襲に乗じて、戸籍回復を申請、和賀英良という新しい自分を手に入れた。療養所で暮らす父・本浦千代吉は成長した我が子の写真を見せられ、泣きむせびながらも「知らん」と言い張る。この映画が公開された当時はもちろん、今でも同様の偏見・差別は続いている。

二〇一八年には元患者の家族らが患者本人だけでなく、その家族も深刻な差別を受けたとして国に損害賠償を求め、熊本地裁に集団提訴し、二〇一九年に原告勝訴の判決が下った。だが、原告となったことで初めて家族にハンセン病患者がいたことが判明し、離婚に至った事例もある。また、家族補償の制度ができて、根強い偏見・差別を恐れ、申請をためらう人が多いのが現実である。ハンセン病問題への無理解の背景に、かつて国民一体で患者を排除した事実があることを忘れてはならない。本作は現代社会への警鐘でもある。



国立療養所大島青松園の2016年の空撮
(提供：国立療養所大島青松園)

ことばの迷い道

在日は「ひどすぎる」?

キム ユジン
金 悠進

民博 機関研究員

いつもどおり関西国際空港で特別永住者証明書を見せて再入国カードに記入した。よし、出国手続き完了。さて、目的地は調査地であるインドネシアだ。ジャカルタの空港につくと、いつものようにタクシーの客引きが日本語で話しかけてくる。インドネシア人からすればわたしが日本人か韓国人かの区別はつかないだろう。わたしたちがインドネシア人とマレーシア人の区別がつかないように。

しかし、わたしが韓国人であることはたまにばれる。名字がキムだからだ。インドネシア人はキムと聞くと金正恩キムジョンウンを思い出すらしい。だから正直に「日本から来たけど韓国人です。じつは」と答える。

問題はここからだ。どうやって「在日」を説明すればよいか。日本語ですらまともに説明できないのに。「日本で生まれて、日本で育った。だから日本語は話せるけれど、韓国語は話せない」。ここまでの説明はインドネシア人にも納得がいく。多民族国家インドネシアで、そのようなマイノリティはありふれている。中国を出自としてインドネシアに居住する華人系の人も少なくない。問題は次だ。「でも国籍は韓国だ」。そういうと、みな動揺する。なぜだと聞かれても、わたしもうまく答えられない。「在日」は、インドネシア語に翻訳困難だ。

突然、そばにいたインドネシアの友人が笑みを浮かべてあることを発した。「カチダ」。ん？何語だ？ まわりのインドネシア人は笑っている。「カチダ」と言いながら。

これはどうやらスンダ語らしい。西ジャワ州に多く居住するスンダ民族が日常会話で使う地域語だ。ジャワ語やバリ語などの地域語と、共通語としてのインドネシア語は、かなり違う言語だ。「カチダ (Kacida)」は、インドネシア語で「クトゥルラルアン (ketuluran)」だという。わたしはすぐに日伊辞書を引いた。

「ketuluran…余りに度を越してひどい」。思わず笑ってしまった。面白い。確かに、ある意味「余りに度を越してひどい」。日本で生まれ、日本で育ち、日本語は話すが、韓国語は話せない（インドネシア語は話せる）、だが国籍は韓国、ちなみに選挙権はない。うん、じゆうぶん度を越している。「カチダ」の語感とその汎用性を気に入ったわたしは、スンダ人へのインタビュの際に、自己紹介のつかみとして「カチダ」を使った。外国人がそんなスンダ語をよく知っているなど、スンダ人との距離をぐっと縮めるツールとなった。逆にスンダ人だと思いついで「カチダ」と言うと相手はポカンとするときがある。インタビュの相手がスンダ語話者かどうかを見分けるツールともなる。「カチダ」はそのまま「在日」を意味するものではない。もっと広くておおきな意味合いをもつ表現だろう。インドネシアには、そうした日本語で説明できない表現をカバーしてくれることばがある。「カチダ」はそのひとつだ。

もしわたしが在日でなかったならば、「カチダ」に出会うことはなかっただろう。在日はひどすぎるか？ いや、案外悪くないかも。

編集後記

今年は例年になく大雪に見舞われ、各地で犠牲者がでたり車が立ち往生したりし、改めて雪の怖さを思い知らされている。雪が多く降る地域では子どもはともかく、大人にとって雪は厄介者で、わたしの故郷、札幌でも雪かきの大変さから、子どもの巣立ちに合わせて戸建てからマンションに移る中高年が増えている。だが、その大変さを逆にとり、除雪ボランティアを通じたコミュニティの再創造に結びつけている地域もあると知り、今回の特集「逆転の雪」を組もうと思い至った。本特集では雪の否定的イメージを逆転させる、こうしたさまざまな営みが紹介される。巻頭エッセイの後氷期や縄文時代に遡る雪の恵みを含め、除雪による雇用創出や地吹雪体験などの観光活用から、楽な馬そり、雪や凍った川で広がる人のつながり、はては凍傷予防まで、いずれも興味深くかつユニークな話題が集まった。北日本がヨーロッパと比べても屈指の積雪地帯であるというのも考えさせられた。

表紙の写真を見て、大きな雪が「のつとつと」（音もなくみるみる）降りつもるさまをこの津軽弁の響きとともに思い出した。本号の特集を機に、津軽地吹雪会から同会が収集してきた稀少な角巻が標本資料として民博に寄贈されることになった。博物館ならではの展開と縁に、有り難くまた嬉しく思う。（南真木人）

●表紙 厳寒の津軽で地吹雪体験を楽しむ人びと（提供：青森県五所川原市）

次号の予告

特集

「地域の記憶と博物館」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
 (電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



月刊みんぱく 2021年2月号

第45巻第2号通巻第521号 2021年2月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
 編集委員 南真木人（編集長） 上羽陽子 齋藤晃
 菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾
 デザイン 宮谷一欵 長岡綾子
 制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
 印刷 株式会社 遊文舎

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
 *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

みんぱくフェイスブック
 みんぱくツイッター
 みんぱくインスタグラム
 みんぱくYouTube

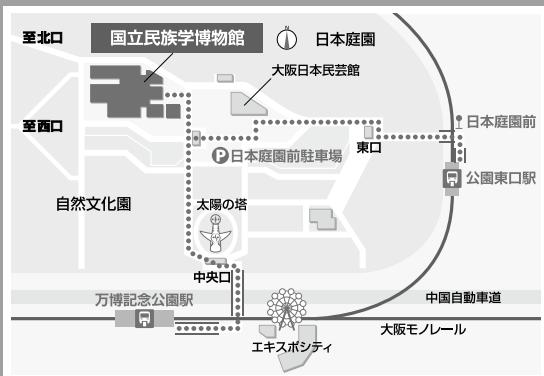
<https://www.minpaku.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

森の洋食 グリルみんなぱく

みんなぱくのレストランが「森の洋食 グリルみんなぱく」としてリニューアルいたしました。洋食をメインとしたお食事のほか、軽食やデザートもご用意しております。ご観覧後の休憩にもご利用ください。また、みんなぱく友の会会員の方には、優待サービスをご用意しております。詳しくはお問い合わせください。



茸デミグラスソース
オムライスセット

淡路島産国産牛
ハンバーグステーキ定食



焼き抹茶のタルト



営業時間：11：00～16：30（ラストオーダー 16：00）
休業日：毎週水曜日、年末年始（12月28日～1月4日）
電話番号：06-6310-0810